

アンネ・フランクを想起/想像する(2) : 伝記的共時性と深い時間・記憶 : 小林エリカ 『親愛なるキティーたちへ』

SUZUKI, Tomoyuki / 鈴木, 智之

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences

(巻 / Volume)

65

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2018-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021387>

アンネ・フランクを想起／想像する（2）

——伝記的共時性と深い時間・記憶：小林エリカ『親愛なるキティーたちへ』——

鈴木智之

戦争と日常が、同時にすすんでいるということが、いちばん、おそろしい。
どうでもいいけど、もう、ほんとうに、やめてほしい。

（小林エリカ『空爆の日に会いましょう』）

1. 小林エリカ：アンネ・フランクとの出会い

さまざまな表現領域（小説・マンガ・現代アート）を自在に往還しながら、現在と過去のつながりを解きほぐし、結び直そうとしている小林エリカ¹。その活動の原点にも、アンネ・フランクとの出会いがあったことを、彼女は自ら明かしている。10歳の時、自宅の寝室の奥の小部屋に潜り込んで、家族の本棚を探っているうちに、偶然『アンネの日記』を手にとる。その小部屋は、家のなかで唯一、彼女が「たったひとりきりになって、思う存分、泣くことができる場所だった」（11）という。

私10歳、小学5年生の夏、またいつものようにしゃくりあげながら本を漁っていたところで、私は『アンネの日記』という本に出くわした。

小さな箱に入った、布張りの、白い本。金色の文字で箔押しされた「アンネの日記」という文字。

箱は鮮やかな黄色と深い紫色に彩られていて、表紙には女の子の顔と外国の家の風景がえんぴつ書きのような絵で描かれている。裏を返してみると手書きで綴られた外国語の文字がある。

私は、その本を手に取り、そして、鼻水を啜りあげながら、寝転がって、ページを開く。

白黒写真が何枚も続いていた。

女の子の写真があった。私とおなじくらいの年頃に見えるペンを手にした外国人の女の子。

それは、日記だった。

学校のこと、友だちのこと、忍び寄る戦争のこと、それから、《隠れ家》へと潜んだこと。気づくと、私は夢中でそれを読んでいて、窓から差し込む光はもうぼんやりと薄暗くなりかけていた。

台所から母が私を夕食に呼ぶ声が聞こえる。（12）

小川洋子がそうであったように、『アンネの日記』との遭遇は、小林を「言葉」の表現へと向かわせる契機となる。それは、「書くこと」によって世界と自己をつかみ直す可能性の発見であった。彼女は、ある対談の中で、次のようにふり返っている。

私の場合、10歳の頃からしばらくはアンネ・フランクのことで頭がいっぱいだったんです。『アンネの日記』で彼女は、「書くことによって、新たにすべてを把握しなおすことができるからです。わたしの想念、わたしの理想、わたしの夢、ことごとくを。」と書いていて、ジャーナリストか作家になりたいという。当時の私にとって年上のお姉さんだったアンネは、心からの憧れでした。不条理にも果敢に立ち向かおうとする意志が溢れるその文章に魅了されました。だから私もいつかそんな気高い女の子になりたい、大人になったら、絶対にジャーナリストか作家になるんだと思っていて。以来、ずっと作家になりたいと思いつけていて、女の子という年を遥かに通り越してもなお（笑）、そう思っています。10代後半には、戦場カメラマンになろうと考えてみたこともありました。（小林・巽 2014：228-229）

では、その「心からの憧れ」は、彼女をどのように導いていくのだろうか。

2008年、小林は「ぼくのアンネ」と題された短編小説を発表している。この作品では、郊外の住宅地に暮らす少女が、「叔母」に向けて「親愛なるアンネのおばさんへ」と呼びかけながら日記を書く日々が、大人になった「わたし」の回想として綴られていく。

「わたし」は、14歳の時にはじめて自分に叔母がいることを知らされる。しかもそれは、その叔母の死没の知らせと共に、であった。叔母は、もともとは男性で、安藤念次という名であったが、同性愛者で女装の人物であった。これに対して、「わたし」はずっと「男になりたい」と願っている女の子である。「あんどうねんじ」の「あん」と「ね」をとって、「わたし」は彼女を「アンネのおばさん」と名づける。「小学校6年の時に」「アンネの日記を読んでもとても感動」した経験のある「わたし」は、残された部屋の中で見つけた叔母の日記帳を自分のものにして、アンネ・フランクさながらに日記をつけていく。

「わたし」は、幼馴染の少年と共に、叔母の住んでいた部屋に忍び込み、そこを「隠れ家」と名づける。そして、二人はそこではじめてのキスとセックスを体験する。しかし、「隠れ家」は、やがて引き払われ、残された本や物も引き取られてしまうことになる。

この作品では、14歳の少女の「成長」と「性的な同一性の揺らぎ」、そしてはじめての「体験」を迎える日々が、「すでに死んでしまった人（アンネのおばさん）」の「日記」を引き継ぐというモチーフとともに、描き出される。

日記は、郊外的な日常を生きていく主体の内言の場として、物語の中に挿入されていく。“日記を書く”ことでかろうじてこの世界とわたり合っている“少女”の物語。それが、アンネ・フランクに憧れていた小林の自画像の投影であることは、想像に難くない。

それにしても、なぜこの日記がそこまで彼女を引きつけるのか。アンネ・フランクの記憶を呼び起こすことによって、小林エリカはいったい何をしているのだろうか。これを、2011年に刊行さ

れた著作『親愛なるキティーたちへ』を中心に考えてみることにしよう。

2. 『親愛なるキティーたちへ』——もう1冊の日記との出会いと旅の始まり

『親愛なるキティーたちへ』に語られるのは、2冊の日記を携えて旅をする「私」（小林エリカ）の物語である。

その1冊は、『アンネの日記』である。既述のように、小林にとってアンネ・フランクは、少女時代からの憧れの存在であり、言葉によって世界と対峙するスタイルを教えてくれた人であった。

心の友キティーを持つ、アンネが羨ましかった。

書くことで、どんなに不条理な現実や困難にも、ひとり懸命にそこに立ち向かってゆくアンネの姿は、素晴らしく強く、美しく見えた。

私は、アンネの日記を見つめ、読みながら、思う。

私もいつか、きっと、成長して、彼女みたいに、強く、賢い、女の子になりたい。(15)

もう1冊は、小林の父親がかつてノートに書き記した日記である。父・小林司は、精神科医であると同時に、作家・翻訳家でもあり、妻・東山あかねとともにシャーロキアン（シャーロック・ホームズ研究者）としても知られる人物である。小林エリカは、31歳の時、実家に戻って、10年ぶりに「秘密の部屋」に入りこむ。そして、父の古い日記帳を見つける。

小林司は、昭和4年（1929年）生まれ。娘・エリカが発見したその日記には、昭和20年（1945年）7月22日から、ちょうど1年後の昭和21年（1946年）7月22日までの日々が記録されていた。昭和20年から21年、父・司は16歳から17歳になる頃。金沢の飛行機工場に勤労働員。その後、富山県井波の飛行機工場へと移され、敗戦を迎える。「私」は、戦時から戦後へと移行していく時代の父親を発見するのである。

それぞれの日記が、「私」にとって魅力的なテキストであったことは、想像に難くない。しかし、どうして彼女は、二人の日記を共に携えて旅に出るのだろうか。

それは、一つの事実の発見をきっかけとしている。

父が生まれたのは、昭和4年、1929年。

それが、アンネが生まれた年とおなじ年であることに気がついたのは、実家から戻り、『アンネの日記』をふたたび手にした時のことだった。(25)

アンネ・フランクと父親は同じ年に生まれていた。偶然の一致。その事実の発見は、アンネと自分自身との“距離感”を変えることになる。

自分が生まれる前に生き、そして死んでしまった少女。その人と私のあいだには歴史的な“隔た

り”がある。しかし、彼女の人生の時間は、そっくりそのまま「自分の父親」の少年時代に重なるものであった。その父が生きてきた時間は、「私」にとって、必ずしも歴史的過去ではない。二つの時間（アンネの時間と父の時間）の同時性の発見は、「私」とアンネ・フランクとの関係を、“遠くも近くもある”測りがたい距離にあるものへと変質させる。

その発見を機に、「私」は、2冊の日記と共に「旅」に出ることにする。その旅の過程で、「私」自身がまた日記を書く。『親愛なるキティーたちへ』は、この3冊の日記のコラージュとして成立している。「キティー」とはもちろん、日記に授けられた名前であり、日記の言葉が差し向けられる“宛先”でもある。親愛なるアンネ・フランクと、親愛なる父へ、いま「私」は言葉を贈ろうとする。

その旅は、ドイツの町ベルゲン・ベルゼンにはじまり、ベルリンを経てポーランドのアウシュヴィッツへ、そしてオランダのベステルボルク、さらにアムステルダムへ、最後に再びドイツのフランクフルト・アム・マインへと到る。それは、アンネ・フランクが命を落とした場所から、順番にさかのぼって、《隠れ家》のあったアムステルダムへ、さらにはアンネの生まれ故郷の町へと遡行する道である。つまり、“死から生へ”とさかのぼる道筋。その行程を選んで、小林はアンネ・フランクの生涯を逆向きにたどり直す。2009年3月30日から4月15日まで、ノートとスケッチブックを携えて。

『親愛なるキティーたちへ』では、日記とスケッチをベースにこの旅の記録が再構成され、そこに、折に触れ、かなりの頻度で、アンネ・フランクと父の日記からの抜粋が差し込まれていく。

では、「私」は、この旅に何を求めているのか。『親愛なるキティーたちへ』を書くことで、つまり、複数の日記のテキストを編み上げることで、小林は何をしているのだろうか。

3. ポストメモリー実践としての旅の記録

小林が試みているのは、一面において、親世代の戦時体験を追体験するための旅とその記録である。それを、「ポストメモリー実践 (postmemorial practice)」と呼ぶことができるだろう。

記憶されるべき出来事を直接経験した人々ではなく、その後を生を享けた世代の人々による記憶実践を、「ポストメモリー (postmemory)」という言葉で主題化したのは、アメリカの比較文学者・文化理論研究者マリアンヌ・ハーシュである。記憶されるべき出来事が、自分が生まれる前に、もしくは自覚的に意識できる年齢以前に起きたという条件のもとにある時、人はいかにしてそれを想起し、表象することができるのか。そこでは、“隔たり”と“近接”，“距離”と“接触”が同時に備わるような両義的な関係が、過去と現在のあいだに結ばれる。完全に遠く隔てられているのであれば、「ポスト-」という接頭辞を使う理由がない。完全に自分たちのものとしてあるのでもなく、しかし無関係なまでに遠のいてしまっているのでもない。その曖昧な位置を、この言葉は指し示している。

ハーシュが、「ポストメモリー」という言葉を最初に導入したのは、写真という媒体が、家族の

記憶の構成と、「家族性（familiarity）」「家族イデオロギー」の構築にいかに関わっているのかを論じた著書『ファミリー・フレイムス 写真・語り・ポストメモリー』（1997年）でのことだった。その最初の章で、ハーシュはひとつの自伝的エピソードを呼び起こしている。

1960年代に、両親と共にルーマニアからアメリカに移住してきた彼女は、ロード・アイランドで、ヤクボヴィッツという一家からアパートメントを借りて暮らし始める。ヤクボヴィッツは、ポーランド系のユダヤ人で、アウシュヴィッツの収容経験をもつサヴァイヴァーであった。ハーシュは、ヤクボヴィッツ家の居間に、額に飾られた古い写真を見いだす。そこには、ヤクボヴィッツ夫妻それぞれの、最初の配偶者とその子どもたちが写っている。彼ら・彼女らがどのようにして命を落としたのか。収容所から解放された後、ヤクボヴィッツ夫妻がどのようにして出会い、結婚することになったのか。そして、抱えきれない喪失の痛みの中で、どのようにして新しい生活を築いてきたのか。自分が直接には見ることのなかった過去に、彼女は思いをはせる。「家族写真」を媒介として、アウシュヴィッツの記憶が、その次世代の生活空間に挿入されていくのである。

さらに後年になって、ハーシュは、自分の夫であるレオの伯母フリーダ・ウォルフィンガーの写真に遭遇する。フリーダは、リガのゲッターに暮らし、収容所での生活も経験したサヴァイヴァーである。その写真は、彼女の生存の証拠として、レオの母親のもとに送られてきたものであった。

家族写真によって媒介された「犠牲者」と「生存者」のイメージ。それは、戦時経験も収容所経験ももたない人々の生活空間（リビング・ルーム）の中に、先行世代の体験の痕跡を呼び込み、成長の環境を濃密な記憶の場としていく。こうした状況のもとで、ホロコースト経験者の「第二世代」が、その親たちの戦時の体験（とりわけ、収容所体験）を、自らの記憶として継承し、呼び起こし、表象するようになる。ハーシュが「ポストメモリー」と呼んだのは、自分自身が生まれる前、あるいは自覚的に意識する前に起こった災厄とのつながりを、記憶という形で保ち続ける行為、あるいはその所産である。

しかし、それは本当に「記憶」と呼びうるものなのだろうか。狭い意味での「記憶」を、その個人が経験した出来事の銘記と想起として位置づけるならば、自分自身が生まれる前に親たちが生きた現実には、その域には収まらない。自分が生まれる前の出来事は、通常「歴史」の領域に属する。しかし、親たちの経験の濃密な記憶の中で育ち上がった子どもたちにとって、それは「歴史」と呼びうるような、距離を置いて語りうる「過去」の領域に属するものでもない。「世代的」には隔てられながらも、私的で親密な結びつきを有するがゆえに、それは「歴史」から区別されるのである。したがって、「ポストメモリー」は、歴史と記憶のあいだに位置する。ハーシュは言う。

私は、いささかのためらいとともに「ポストメモリー」という用語を提起する。接頭辞「ポスト（脱一、一以後）」が記憶を超えてしまいかねないということ、したがって、ノラが恐れるように、純粹に歴史の領域に立ち入ってしまいかねないことを意識するからである。私の読みの中では、ポストメモリーは、世代的な距離によって記憶からは区別され、深い人格的な結びつきによって歴史からは区別される。(Hirsch 1997 : 22)

“隔たり”と“近接性”。その双方を同時に備え、(狭義の)「記憶」の外部に位置しながらも、自分自身の生に直接結びつく形で“想起”される過去。これが「ポストメモリー」である。この両義性は、ハーシュののちの著作においても、強調されている。

『ポストメモリーの世代 ホロコースト以後の著述と視覚文化』(2012年)では、「事後の世代 (generation after) が、自分が生まれる前に起こった、個人的、集合的、文化的外傷体験に対して示す関係を表す」ものとして「ポストメモリー」が定義され、その上で次の様な解説が加えられている。

その経験に対して、彼ら・彼女らは、自分の育ち上がった環境を取り巻く、物語や、イメージや、行動を手段としてのみ、記憶する (remember) ことができる。しかし、それらの経験は、彼ら・彼女らに極めて深く、情緒的に伝えられているので、彼ら・彼女ら自身の記憶を構成するかのように見える。このようにして、過去に対するポストメモリー的つながりは、想起 (recall) によってではなく、想像的投企、投影、想像を通じて現実に媒介される。継承された圧倒的な記憶と共に育ち上がること、自分の誕生や意識的な自覚に先立つ語り支配されることによって、自分自身のライフストーリーが先祖たちのそれによって置き換えられてしまい、さらには吸収されてしまう危険が生じる。それは、間接的にはあるが、今なお語りによる再構築を拒み、理解の域を越えているような出来事のトラウマ的な断片によって形作られるということである。それらの出来事が起こったのは過去のことである。しかし、その影響は現在にまで続いている。これが、ポストメモリーの構造であり、その世代のたどる過程であると、私は思う。(Hirsch 2012: 5)

このように「ポストメモリー」は、想起と想像のあいだに成立する。それは先行する世代の体験との“連続性”と“断絶”のあいだで揺れ動く。しかし、「以後の、事後の (post)」という接頭辞が加えられるとしても、それはやはり「記憶」に属するものとして理解されなければならない。なぜなら、知的認識として言説化された「歴史」に対して、「記憶」は身体的で情緒的な反応と共に呼び起こされ、時には抑圧的な機制のもとに忘却され、それゆえにまた想起の実践の中で回復され、再構築される性格をもつからである。

さてそれでは、「後続世代」による記憶実践のうち、一体どの範囲までを「ポストメモリー」という言葉で指し示すことができるのだろうか。『ポストメモリーの世代』における定義に示されるように、ホロコーストの経験だけにこの言葉の射程は限定されていない。ハーシュ自身がすでに、その他の「個人的、集合的、文化的外傷体験」にまで拡張して、「ポストメモリアル」な実践や作品を論じている。またその際に、現実の家族関係の中で世代を超えて引き継がれる記憶だけが、主題化されているわけではない。例えば、性暴力の記憶を引き継ごうとする女性芸術家たちのアート・パフォーマンスは、ポストメモリー実践として語られうる (Hirsch 2017)。

ハーシュは、家族の中で引き継がれる記憶と、その外にまで広がる記憶とを、「家族的ポストメ

モリー（familial postmemory）」と「系譜＝提携的ポストメモリー（affiliative postmemory）」という概念対において区分することを提案している。後者は、家族内における「垂直的」な系譜関係にはない人々が、何らかの形でその当事者との結びつきを確認または獲得しつつ、自分自身では経験しなかった出来事の記憶を呼び起こし、表象しようとする行為を指している。それは、次世代の人々による、「水平的」なつながりの上に成立する「ポストメモリー」である。例えば、ユダヤ人の血を引く人が（自分の家族ではなくとも）ホロコーストの犠牲者の経験を引き継ごうとする時、そこでは「系譜的關係（affiliation）」が強い意味をもっている。同様に、沖縄の作家が、家族の経験とは関わりなく沖縄戦の記憶を語ろうとする時、そこにはやはり、直接の血統を超えた「系譜的つながり」が意識されている（Ikeda 2014 参照）。それもまた、「ポストメモリー」の領域において論じることができる。

これを認めると、ポストメモリーの領域は、原理的には果てしなく広がる。

例えば、私（鈴木智之）が「ヒロシマの末裔である」といって、原爆の記憶を語ることでできるし、私たちは皆「ホロコーストの生き残りなのだ」という認識のもとに「収容所の体験」を再現して見せることも（少なくとも理論上は）不可能ではない。

ただし、適用範囲を無制限に拡張してしまうと、この言葉の意味は希薄化してしまうだろう。「ポストメモリー」の典型的な場は「家族」にあり、親や祖父母たちの過去とのつながりの中で生活する人々の記憶実践が、その中心的な像をなしている。「系譜＝提携的」なつながりにおいて「記憶」の継承が有意味なものになっているとしても、「ポストメモリー」という言葉を適用する上では、家族や親子に類する（系譜的）つながりが想定されていることが条件になるだろう。先行世代の記憶が、後続する世代の生活環境に引き継がれ、後者のライフストーリーの構成に強い影響を与えている。それが「ポストメモリー」の生成文脈なのである。

小林エリカにとって、父・小林司の日記に書かれた戦時体験は、言葉の元々の意味において「ポストメモリー」の領域にある。親世代の災厄の体験が、娘によって想起され、想像される。その実践の媒体として、父の日記は、彼女のもとにある²。

アンネ・フランクの経験は、父のそれとはもちろん異なる距離感にあるものとして現れる。その記憶を「ポストメモリー」という言葉で呼びうるかどうかは、上に述べたような意味で、微妙なところである。しかし、歴史・社会的な距離をもちつつも、同世代の少女の言葉として読み取ってきたという意味で、そこにはある種の「共時性」が備わっている。書き記された経験との身体的な共感、むしろ、アンネ・フランクとのあいだで、より強いものかもしれない。日記を通じて小林は、このユダヤ人の少女と同じ時間を共有する感覚をもちえたに違いない。

その上で、質の異なる距離感をもって現れる二つの過去（父の日記とアンネの日記）が、“同時代”のものであるということが、ひとつの事実として確認される。その2冊の日記と共にアンネ・フランクの足跡をたどる旅に出るということは、3つの時間（父、アンネ、「私」の時間）をシンクロさせつつ（共時的な関係に置きつつ）、過去と現在の隔たりと近接性を体感しようとする企てになっている。ある意味でそれは、父親と自分との“つながりと距離”を確認する作業であり、同

時に、父を媒介として「私」とアンネ・フランクをつなぐ試みでもある。

同じ時代を、遠く離れた場所で生きた父とアンネ・フランク。その二人は、「私」にとっては、もともとそれぞれに異なる意味で親密な他者であった。しかし、父親との「垂直的」な系譜関係があいだに挟まれることで、その父と同年に生まれたユダヤ人の少女は、特別な距離にある存在として、「私」の方へとたぐり寄せられる。そこには、『アンネの日記』とその一愛読者の関係にとどまらない、“固有の”結びつきが生まれようとしている。二人の日記を手がかりに、「私」は、時・空間の中での自分の位置をとらえ直そうとしているようにも見える。『親愛なるキティーたちへ』は、少し変則的なポストメモリー実践の記録である。

4. 伝記的共時性——並列する複数の時間

時・空間を超えた関係の結び直しは、どのようにしてなされていくのだろうか。

この旅において、「私」は、書物（文字テキスト）を読むことを通じて追体験していたアンネ・フランクの生を、今度は、空間的な踏査（その場所に立って、歩いてみること）を通じて、身体的に追体験しようとしている。

アンネが、死んだ場所、生きた場所。

日記に記された、記されることのなかったそのひとつひとつの場所を、私は歩きたかった。

いま、そこにある街を、虫を、色を、私は見たかった。

死から生へ、アンネが生きた場所と時間を遡る旅に出ることを、決めた。(27)

ごく単純に言って、ある人の生の航跡について“知っている”ということと、その人の生が営まれた場所に立ってみることとは、経験の質がまったく異なる。他者の生の了解の密度が（少なくともそのモードが）別様になる。例えば、その人は〇〇という場所で殺されたのだと知っていることと、あの人はここで死んだのだと感ずることのあいだには、大きな違いがある。

他者の生と死の行程を、物質的な触感において再確認すること。その記録として「私」は、文字とスケッチという二つの手段を用いている。例えば「私」は、《隠れ家》のアンネの部屋の壁紙の模様を描き写している（図1）。

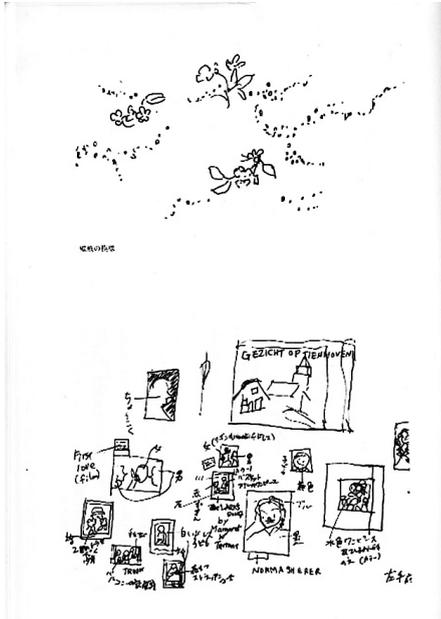


図1 《隠れ家》の壁のスケッチ（185）

アンネが見ていた、触れていた壁の質感を、自分の目と手に移してくるような振る舞い。「私」が見たものは、カメラのレンズという媒体ではなく、小林エリカの身体を通じて描き取られ、ある意味では、その場所に彼女がいたという事実の痕跡として、私たちの前に示される。アンネ・フランクの生の痕跡に触れる小林エリカの存在の痕跡。スケッチだけではなく、この本全体が、その痕跡を写し取る（移し取る）作業の途上にあるように思える。

この本の魅力を支える大きな要素は、小林のスケッチである（図2）。“もの”や“光”に触れることが、アンネ・フランクの生に触れることにつながっている³。



アウシュビッツ強制収容所
射殺場「死の壁」の前に供えられた鎮魂のための蝋燭

図2 「アウシュビッツ強制収容所 射殺場『死の壁』の前に供えられた鎮魂のための蝋燭」（83）

このようにして、小林は、“その場所”にある“もの”に触れ、それを“絵”に描き出す。

しかし、アンネの生をたどるだけであるならば、もう1冊の日記帳は要らない。

「私」は、アンネ・フランクの死から生へとさかのぼりながら、このユダヤ人の少女とまったく同じ時間を生きた少年（少年であった自分の父）の生を写し取ろうとする。

二人の伝記的同時性を手がかりに、軍国化する日本に生きた少年（その国は、ヒトラーのドイツと同盟関係あった）と、ナチス・ドイツの迫害を逃れようとしてオランダへと逃れ、小さな部屋に息を凝らしていたユダヤ人の少女の、生の同時性が再確認される。

だが、同時であることが、どのような意味をもつのだろうか。

二人は確かに、同じ時代に戦時体制下を生きていたという点ではつながっているが、それ以外の類似点はない。まったく異なる境遇で、まったく異なる人生を歩んだ、“縁もゆかりもない”人間である。

その二人を結びつけているのは、たまたま父の小部屋の中に、アンネの日記と父の日記を見つけてしまった“娘”の存在だけである。しかし、その娘にとっては、二人の人生の同時性を手がかりに、二つの生活の記録を突き合わせていくということが、自分自身が生まれ落ちた世界のあり方を“言葉によってつかみ直す”試みになる。

ある意味で、それは歴史意識を獲得することだと言ってもよいだろう。小林は、ナチス・ドイツによるユダヤ人の虐殺の歴史を、その犠牲者の生の足跡に沿って追体験していくのであるし、同時に、軍国教育を受けた少年の敗戦の経験と、その後の（＝戦後の）生を読み直すことで、自分の生きている世界の歴史的な成り立ちを把握し直そうとしている。

しかし、そういう言葉遣いでまとめてしまうと、“歴史”という枠組みがあまりにも平板な形で呼び込まれてしまう。小林が試みていることは、“歴史”として語られてしまう時間の平面を突き抜けて、通時的な現実（過去から未来へ不可逆な流れの中に生起する現実）を、共時的で並列的な重層の中に位置づけてみることである。それによって、過去の生と自己の生との呼応関係を浮上させることであったようにも思える。

“呼応関係”というだけではまだ足りないかもしれない。時間的な推移の中で因果連関によってつながっていくような過去と現在ではなく、隔てられていたはずのもの（過去）がアクシデンタルに“今”の自分に触れてしまうような結びつき。その接触が生じる場所として“現在”を体験すること。今現在の体感の中に“過去の光景”を呼び込むこと。そうすることで、“それは、かつて、ここにあった”ことを確認する。しかし同時に、その体験は、“それが、もはや、ここにはない”もの（不在のもの）であることをも教える。

例えば、アウシュヴィッツでの「私」の経験。

収容所の建物を出て、その裏手を歩く。

ひっそりとしたレンガの壁があった。その上にある土手を青い芝生が覆っている。

低い煙突。窓には黒い格子状の柵が嵌められている。

小さな扉は開かれたままになっている。

私はそこへ足を踏み入れる。室内は、薄暗い。

床はコンクリートが剥き出しになっていて、空気が淀んでいる。

先の部屋へ進む。

鎮魂のための焰。

人は誰もいなかった。

私はひとり焰を見つめ、突如、私のいま居る場所がガス室であることに、思い至る。

そう気づいた瞬間、呼吸が苦しくなる。咄嗟に振り返って、後ろの扉が閉められていないことを確かめる。外へ駆け出そうとする。一步一步は足に鉛が入ったように重い。一步一步を踏み出すコンクリートの地面から死体が足に絡まるような気がして、時間が恐ろしく長く引きのばされる。

けれど、いまここには、裸にされた人たちもいなければ、シャワーから毒ガスも出ない、追い立てて扉を閉める看守もいない。

そして、扉は開いている。

外へ、扉の外へ。

明るい外へ。

扉を抜ける。

外では、何ごとともかわらず、燦々と明るい光が降りそそいでいる。

光の中では、子どもたちが輪になってガイドの人の話を聞いている。(84-86)

気づかぬうちに、かつての「ガス室」に、ひとりで足を踏み入れてしまった「私」は、突如そこが、かつてたくさんの人々が殺されていった場所であることに気づき、自分がそこに閉じ込められてしまうことを恐れる。それは、きわめて身体的な次元での恐怖としてある。しかし、もちろんそこにはもう、裸にされたユダヤ人たちはいない。扉は開いており、その外には明るい光が満ちている。

だから、過去は過去のままである。それは現在とは隔てられている。しかし、その“隔たり”は、何時間とか何年とかという単位で測れるような“距離”を指すものではない。私の踏み出す足に死体が絡まるような感じ。その感覚的な至近距離に、過去は現前している。

ここでは、過去と現在は完全に共時的な空間に再配列されているわけではない。過去は“過ぎ去ったもの”として、私たちの現在から隔てられている。しかし、それは限りなく“並列的”に、今ここに生きられている時間に、接続している。

この両義的な、複数の時間の接続を形にする上で、複数の日記を突き合わせるという方法ほど、適切なものはないかもしれない。というのも、日記とは、ある意味では常に“現在”の反復によって書かれているからである。もちろん、一日の終わりにふり返ってみた時点で、すでに書かれるべき出来事は“過去”のものだと言える。しかし、それはやはり“今日の出来事”である。“今日何があった”“今日何をした”…。その果てしない反復的な積み重ねが日記を構成する。日記は、“反

復する現在”の書記形式である。

したがって、日記と日記の突き合わせは、(形式的に)複数の現在の並列を可能にする。もちろん、そこにも“歴史的時間”は流れている。複数の現在のあいだの時間の推移は日付によって示される。日付は、“今日”と“今日”の隔たりを示す。しかし、他方で、他の日記との同時性を示すこともできる。アンネ・フランクがここでこれこれのことをしていた日に、父はどこにいて何をしていたというような、呼応関係呼び起こす。かくして、“過去”は“過ぎ去ったもの”、“歴史的日付を有するもの”としての性格を失うことなく、そのつど新たな“現在としての質感”をともなあって併存する。

複数の日記の往復によって構成されるテキストが、私たちの前に示すのは、この少し微妙な時間の成り立ち方である。

5. “日常”に“戦争”を接続する

アンネ・フランクが生きている時間。父・小林司が生きている時間。「私」小林エリカが生きている時間。その3つの時間の断片が、順番に、前後して、並列的に、配列されていく。そこにはどんな効果が生まれるのだろうか。

この時私たちは、前二者が生きているのが戦時の時間であり、小林はそこから隔てられた時間にいるということ、したがってそこには、異質な時間が触れ合い、共鳴しあうということに、目を留めざるをえない。実際『親愛なるキティーたちへ』というテキストが強い印象を与えるのは、(目前に表れていると同時に、「日記」の中に語られる)「収容所」や《隠れ家》のもたらす緊迫と、旅をする小林の日常とのリアリティギャップの鮮烈さにある。異質なリアリティが隣接している感覚、とでも言えばいいだろうか。

小林は、おそらく言葉がとても堪能で、旅行をする上で、言語的な苦勞をしているようには見えない。しかし彼女は、方向音痴というのか、距離音痴というのか、時間音痴というのか、目的地までの所要時間を取り違えてやたらと長い距離を歩いたり、電車の発車時間ぎりぎりに滑り込んだり、切符をもたずに乗って車掌につかまったりと、かなりドジなことをたくさんやっている。旅先で泊めてもらう人に「かりんとう」のお土産を買ってきたのに、スーツケースが開かなくなって悪戦苦闘したり、ベステルボルク収容所へ行くためにタクシーに乗ったら、「初めての仕事」をする若い女性が運転手だったりといった、いわゆる“旅のハプニング”にも事欠かない。旅先での友人たちとの再会や出会いの中で、楽しいおしゃべりや飲み会がある。市場で何を食べておいしかったとか、駅で見た朝焼けがきれいだったとか、肌が荒れて化粧のりが悪いといった、小さなエピソードもたくさん書き込まれている。少し危なっかしい一人旅の記録として、これはすでに十分楽しいテキストである。

2009年3月30日 月曜日 晴天

銀色のトランクの中へ荷物を詰め込む。スカート、ブラウス、セーター、ワンピース、パンツ、ブラジャー、パジャマのワンピース、タオル、歯ブラシ、化粧道具ひとそろえ、石鹸、シャンプー、リンス、ナプキン、カミソリ、ブラシ、マニキュア、爪切り、スニーカー、ガイドブック各種、ハンドバッグにパスポート、航空券、予約した列車の電子切符、ホテルの予約チケット、プリントアウトした地図、ペン、携帯電話、デジタルカメラ、お財布、クレジットカード、それから、アンネの日記、父の日記、そして、私のまだ真新しいノート。朝6時半、トランクを閉じて、家を出る。

黒いオーバーコート。ブーツを履く。ヨーロッパはなお寒いだろうか。首にマフラーを巻きつける。

いってきます。(30-31)

2009年4月1日 水曜日 晴天

6時半起床。テレビをつけて、ベッドで白パン、ストロベリーヨーグルトの朝食。ツェレ駅へ。プラットホームから朝の光がきれい。7時20分ツェレ駅発ユルツェンへ。そこで列車を乗り換えベルリンへ向かう。9時32分ベルリン着。(56-57)

旅日記として、ごく当たり前の記述である。何をもち、何を着て、何時にどこを発って、どこに着いたのか。何を食べ、いくらだったのか、何がおおいかったのか。どこの、どんな景色がきれいだったのか。そうした普通の記述が、旅行日記のかなりの部分を占めている。彼女は、かわいいものに目をとめ、きれいな景色を素直に喜ぶ。とりわけ小林は、きらきら光っているものが好き、である。

小さなツェレの駅前にホテルはすぐに見つかった。こじんまりした安ホテル。大きな金色の鍵を手渡される。部屋のベッドにはピンクのベッドカバー。

受付でベルゲン・ベルゼン行きのバスの時刻表のコピーを貰う。しかし、時刻表の読み方がいまいち判然としない。とりあえず、荷物を置き、街の地図を睨みつつ、旧市街へ。

公園の脇を十分程歩いたところに旧市街はあった。ピンクやブルー、黄色やグリーンの可愛らしい木組みの家々が立ち並ぶ。十六世紀に建てられた家もあるのだとか。「北の真珠」と呼ばれる、ツェレ。可憐な街。石畳の細い路地。獅子の紋章がところどころに。エストニア、タリンの街を思い出す。ともにハンザ同盟の街で、それがそのまま残っているから雰囲気が似ているのかも。

向かいの緑色の芝生の真ん中には小さな川が流れていて、丘の上には白い壁にオレンジ色の屋根のツェレ城が見える。ここでもまた建物と水面の距離が近い。天気がよく、明るい。川面には太陽に光が映り込んできらきらしている。(43)

しかし、こうした瀟洒でシックな街並みの先に、あるいはのどかで田園的な風景の中に現れるのは、陰鬱な記憶が立ち込める場所ばかりである。

ツェレからバスでベルゲンの町へ。しかし乗り継ぎのバスの時間が合わずに、小林は考えなしに「歩いて」ベルゼン収容所へと向かうことにする。見渡すかぎりなにもない荒野の中をひたすら歩く。でも、「ナチスのキャンプ」はまだ「2キロ先」だと教えられる。やってきたバスに飛び乗る。ここまでは、ごくありふれた旅のエピソードである。

しかし、アウシュビッツから移送された人々は、ベルゲンどころかツェレの駅で列車から降ろされ、ここまでの道のりを歩かされたのだ、ということに愕然とする。

1時20分、ベルゲン・ベルゼン強制収容所着。鳥が鳴いている。(45)

こうして私たちは、小林がたどってきた道が、そのまま「アウシュビッツ⁴」から「ベルゲン・ベルゼン」に移送されてきた人々（その中に、アンネ・フランクが含まれる）が歩かされた道であることに気づかされる。のどかな旅の風景の先に、ふとした感じで現れる収容所の門。そこが旅の目的地なのだ。

このテキストの持ち味（魅力？）は、今現在旅をしている、小林エリカという、31歳の、日本人の、女子の、タフではあるけれど、ちょっと危なっかしい身体感覚を手放さないまま、「記憶の場所」（P・ノラ）へと足を踏み入れ、災厄と暴力の記憶に出会っていくプロセスを描き取っているところにある。

当たり前のように、必ずしもそうではない。アウシュビッツをはじめとする収容所や《隠れ家》を訪ねる者は、かつてそこで起きた出来事の意味に沿って、見たもの・触れたものを感じ取ろうとする。呑気な観光客気分では、それぞれの場所がもっている歴史性を十分に咀嚼することができない。そこには、目前の風景に対する“特異な身体モード”が要求される。

小林が試みているのは、今この時間を生きている等身大の自分の感覚（日常性）をそのままに、“悲劇的な出来事”に接しようとすることでもある。“距離”を保ったまま、飛び越える感じ。彼女は、無理に歴史的な文脈に身を移して日常の自分とは違うことを考えたりすることを、しない。そういうことをせずに、「私」が“記憶”と出会う感じ、とでも言えばいいだろうか。

ここで思い出されるのは、小林が『空爆の日に会いましょう』（2002年）に示した、奇妙な実践のありようである。

この本に記されるのは、2001年10月8日から、2002年2月17日までの小林の行動である。9.11の惨劇の後。「テロとの戦い」という名目で、アメリカ軍がアフガニスタンに空爆を行っていた時期。日本に暮らしていた小林エリカは、新聞やテレビに「戦争か?!」という文字が躍るたびに、①人のうちに押しかけて行って泊まる、②ただしそこではセックスはしない、③その時に見た夢の日記をつける、ことを決意する。

それは、戦闘によって死んでいく人々の中に自分と同じ夢を見ている人がいるかもしれない、自分と同じ夢を見ている誰かが死んでいくのだという「不安」にとりつかれたからだという。「その

時、私が夢を見るときのこと、私と同じ夢を見ているかもしれない誰かが誰かによって殺されて死ぬときのことを、記憶してゆかなくてはいけない、と、思ったのです」（小林 2002：2）。

どこかに落ちてゆく爆弾は、まだ見ぬ愛する誰かを殺すのでしょうか。ならば私は、日本の東京にいて、不確実な空爆や戦争のニュースに踊らされながら、この場所で、爆弾になろう。誰かどこかの男たちのところへと落ちてゆく爆弾です（至って大迷惑なお話ですが）。それで、場所と共に記憶するの。夢を記憶するの。（同：2）

あまりにも突飛な思いつき。しかし、彼女はそれを実行に移す。毎日知り合いの男のうちの誰か、あるいは、町でナンパした誰かの部屋に、「セックスはしない」という約束で泊めてもらう。そして、どこで眠り、どんな夢を見たのか。その日、どんな戦闘が行われ、何人の犠牲者が出たと伝えられたのかを記録することにする。それは、もしかしたら自分が愛することになるかもしれない誰かが、どこかで今日も殺されてゆくことに対する抵抗の身振りだ、と彼女は言う。

こんなふうにして私は、とてもとても個人的ではあるけれど、愛するかもしれない誰かが殺したり殺されたりしていることに反対してゆきたいと思うのです。そして、たとえみんなが戦争のことばかりを口にするようになってしまっても、私はそれを無視しつつ、日常の日々を続けてゆきたいと思うのです。（同：2-3）

ここでは、二つのことが同時に賭け金になっている。戦争に反対すること（誰かが、誰かに殺されていくことに抗議すること）。私は「ここ」にいて、私の日常を継続すること。

それは、ある意味で馬鹿げた企てだと言える。戦争は遠く、アフガニスタンの砂漠や山岳地帯で、アメリカ軍とタリバンのあいだでくり広げられている。日本で日常の日々を送る者が、そのことによってどうして戦争に反対できるのか。言うまでもなく、実質的には何も“できない”。しかし、できないことをやるために、彼女は“無意味”な記憶実践に打って出る。

「空爆」を忘れないこと。その時私はどこで、誰といたのかを忘れないこと。そして、空爆で死んでいった人が「私と同じ夢を見ていたかもしれない」ことを忘れないこと。そのために、私が空爆のあった日に見た夢をすべて書き留めておくこと。その、日常ならざる日常——彼女は自分の家に帰らない、自分のベッドで眠らない——の遂行をもって、戦争の遂行に「抵抗」すること。

自ら擬似難民化し、過剰な禁欲を課す（家に帰らない、セックスしない）。そのようにして“異常な日常”を作り上げることで、“戦争が行われていること”をパフォーマンスに示し続ける。それが、「反戦夢日記」というプロジェクトである。

ここにも、“隔たり”を一挙に超えようとする、不思議な行動力がある。“私がいま生きている日常生活の世界は戦争から遠く隔てられている”。“私はこの日常を生きる、普段通りの私で居続ける（それは戦時的な空間に巻き込まれないということだ）”。しかし、“この遠く隔てられた空間の中で、

日常を継続しつつ、戦争を記録し続ける。愛する人（候補生）の喪失を記録し続ける”。そのようにして、“戦時性”を、自分の“日常性”に接続してしまおうとする振る舞いである。

「戦争と日常が、同時にすすんでいるということが、いちばん、おそろしい」（同：51）と彼女は、『空爆の日に会いましょう』に書きつけている。そのようにして“隔てられている”ものの“同時性”を記録し続けること。ここに、この“馬鹿げた”実践の賭け金がある。

『空爆の日に会いましょう』では、アンネ・フランクには触れられていない。しかし、ある意味で、彼女の振る舞いはアンネ・フランク的である。戦争と日常が隣接しながら隔てられている空間で、戦争が終わることだけを願って、“異常な日常”を継続すること。そして、そのあいだずっと日記を書き続ける。それはまさに、アンネ・フランクが《隠れ家》でやっていたことではなかっただろうか。

『親愛なるキティーたちへ』における「私」の振る舞いも、アフガン空爆時の小林のそれと似ている。彼女は、日常生活者の身体（旅行中ではあるが）をもったまま、アンネ・フランクの悲劇の足跡に踏み入る。その時、政治的、規範的な理念によって武装することはしない。まずは、自分の身一つで、アンネが生きて、死んでいった場所に出向く。自分が見たものを書く、そして描く。体を感じたものをそのまま書き留める。そのようにして、彼女はアンネ・フランクを憶えておくことにする。そのようにして、“日常”に“戦争”を接続する。そこに、小林エリカの方法がある。

では、その方法がもたらすものとは何だろうか。

6. 「深い時間」と「深い記憶」

(1) 「深い時間 (deep time)」

異孝之は対談の中で、小林が、例えば父親とアンネ・フランクが同い年であったことを契機として「歴史的な出来事を、単に世界史レベルで述べるのではなく、全く違う世界のフェーズと連動させている」（小林・異 2014：234）と述べ、ここから、アメリカ文学の研究者であるワイ・チャー・ディモックの「深い時間」という概念を呼び出していく。

ディモックは、『他の諸大陸を通して——深い時間を超えるアメリカ文学』（2006年）という挑戦的な文学史の研究書において、西洋近代的なクロノロジカルな時間の上ではつながない出来事が、隔たりを超えて結びついていくような「歴史性」を指すものとして「深い時間」という言葉を用いている。

この本の序論では、2003年にアメリカ軍がイラクに侵攻した際、「イラク国立図書館」と宗教省内の「イスラム図書館」が破壊され、貴重な歴史資料が灰塵に帰ってしまったという出来事が語られる。この時、イラクの人々は、1258年にチンギス・ハンの孫に率いられた「モンゴル」の軍勢がバグダッドに侵入し、図書館 (libraries) の資料をチグリス川に流してしまったという出来事を想起する。そして、イラク人たちは、アメリカ合衆国の行動を、この長く続く物語の中で理解しよ

うとする。「現代のモンゴル人、新しいモンゴル人がそれ（図書館の破壊）を行ったのだ」と。しかし、そう言われたアメリカ人たちは、その言葉の意味が理解できない。「1258年ははるか昔のことである」、「それは2003年から見れば、745年の隔たりの向うにある」、「アメリカはそれとはまったく関係がないのだ」（Dimock 2006: 2）と彼らは主張する。

ディモックは、この近代的アメリカ人の「見方」、「時間に関するイメージ」に抵抗するためにこの本を書いている。それは、空間化された時間イメージ、巻尺のテープのようなものとしてイメージされる時間である。二つの出来事の隔たりは、その年代上の距離によって測られ、その数値によって出来事は近接していたり、隔絶していたりする。この「線形的な、帯状の連続体としての時間」は、近代の、そして、国民国家の創設した時間である。だが、今この土地で起こっている出来事は、年数においてははるかに隔たった、遠い場所で起きた出来事とのあいだに、（近代的な歴史意識においてはたどり切れないような）つながりを有しているのかもしれない。アメリカ軍によるイラクの図書館の破壊を、モンゴル軍襲来の再現と見なすことを、単なる「比喩」としてではなく、「歴史的つながり」を語るものとして受け止めることもまた可能なのではないか、とディモックは問う。そして、この「深層のつながり」において流れている時間を示すために、「深い時間」という言葉を採用するのである。

この言葉が強調しているのは、一群の長い時間にわたる枠組みであり、それは未来に向けて投げかけられたり、過去に向けてさかのぼったりするものであり、双方向に向かうインプットをとめないながら、多様な関係のループの中に、諸大陸と千年の時を結びつける、濃密に相互作用的な造形物である。（*ibid.*: 3-4）

こうした「深い時間」のイメージを獲得することによって、ある一時点に起こった出来事は、国民国家の枠組みを超え、線形的な時間のつながりを飛び越えて、いつか、ほかの場所で起こった出来事とのつながりを獲得する。そうした歴史的な想像力を喚起しつつ、文学史を書き直すことが、ディモックの目論見である。

巽は、この言葉を引きながら、小林の試みが、通常の時間イメージを超えて、過去の体験との接続の様式を変更しようとするものだと、評価する。

ディーブ・タイムの概念は、小林エリカの表現にとっても重要だと思う。エリカさんが試みているのは、広島・長崎を経験した世代とは明らかに違うアプローチで、歴史を取り込むことです。個々の人間の体験というよりは、もっと集団的な記憶の伝承をしようとしているように見える。（小林・巽 2014: 234-235）

これに対して小林は、「論理的に考えてはいない」けれど、そういうことは「知らずにやっていたりするのかもしれない」（同: 235）と答え、次のように言葉を継ぐ。

基本は、自分の半径3メートルぐらいにあることを書いている。でも、実はその半径3メートルは、すごく遠いところまでつながっている。自分の手元によくよく目を凝らせば、過去の時間も見えてくる。いつもそんな気持ちでいます。

自分の周りのことを丁寧に、丹念に見ていくと、ごく普通に百年前の世界にも、百年後の未来の世界にもつながり得る。空間的な距離についてもそう。自分のすぐそばにあるものをよくよく見てみれば、遠い場所や近い人の心の中、見えないものにだっつながっていけるかもしれない。フィクションの世界の上でのことではありますけど、それは同時に現実のことでもありえるかもしれない。(同：235)

遠い過去は近接的な現実(半径3メートルのこと)につながっている。小林の中には、そんな感じがあるらしい。二つの現実をつなぐのは、歴史的時間、クロノロジカルな時間ではなく、もっと直接的な接続関係としてとらえられている。その時間性を表す上で「深い時間」という言葉は魅力的である。時系列的な順序にしたがってつながっていく「歴史的」で「線形的」な時間軸上のつながりではなく、例えば、アンネ・フランクの今、戦時下の小林司の今と、「私」の今がつながってしまうような接続関係を探して、小林は旅をしている、ということだろうか。

(2)「深い記憶 (deep memory)」

この「深い時間」という言葉は、マーク・フリーマンの「深い記憶」という言葉とも連動する。

フリーマンは『後知恵』(2010年)の中で、個人が生まれてからこの方自分で経験した事柄の範囲を超えて、なお自己のアイデンティティに関わりうる「記憶」の広がりがあるとして、これを「ナラティブな無意識」と呼んだ。私が実際に体験しなかった出来事もまた、「私」の物語に構成的に関わる要素——しばしば潜在的で、折に触れて発見されるような——だというのである。

その事例として、彼は自分自身がはじめてベルリンの町を訪問した時(1997年)のことを記している。ベルリンの町を見物して歩いていく中で、彼の身に不思議な感覚が生じる。

しかしその後、不思議なことが、まったく予想もしていなかったことが、起きた。今でもそのことをどう理解したら良いのかわからない。バスに乗ってベルリンを見物していたとき、それまで遠かったすべてのものが突然身近になったのだ。クレーンも、ビルも、庭も、ブランデンブルク門も、国会議事堂も。魅惑的な光景やどきどきさせる光景だったりしたもの、どんな都市の風景に見入るときにも、同じように眺め、見入る対象だったものすべてが、生きた、息をする存在の類になった。最初にこのことを誰かに説明しようとした際に私は、そのとき、その瞬間に抱いたような強烈な**歴史体験**をしたことがない、と言った。

光景から存在へのこの突然の転換に対する私の反応はというと、深い悲嘆と、それに悲しみと恐怖が混ざったものが一体になったようなものだった。その後のかなりの時間、私は泣いていたか、ほとんど泣きそうだった。大変奇妙でものすごく強力だった。だいたいのところ私はこの種の感情の噴出に身

をゆだねるような人間ではないのだが、この経験には本当に途方もない何かがあったし、これにはひどく心を乱した。（Freeman 2010=2014：106-107）。

「何が起こったのだろうか？」と彼は自問する。そして、自分を突然に脅かし、迫ってきたものは「完全なる他者、私の完全なる外部」であったと思う。

私は過去の出来事——特に恐ろしい出来事——が、乱れたエネルギー場かそのようなものの形で、どうにかして痕跡を残したのではないか、と考えずにはいらなかった。（同：107）

フリーマンはしかし、心理学者らしく、この現象を神秘的に語るだけでは終わらず、いかなる条件がこれをもたらしたのかを自己分析していく。

まず、自分が無自覚のうちに身体化している「文化的要素」、つまりは「伝統」の力が働いていること。次いで、「本や映画や写真、それに多くの他のそうしたものから」もちこまれた「大量の知識」が媒体になっていること。そして、自分自身の「ユダヤ人としての出自」、「ユダヤ人としての宗教的・文化的アイデンティティ」がこれに関わっていること。

しかし、いずれにしても、自分自身が経験しなかった過去の出来事に、自分自身の身体が呼応していく可能性がここで浮上している。その可能性に、フリーマンはそれまでまったく無自覚であった。

私が「私の人生」と呼ぶ付置の中に現れた歴史の次元があって、それにほとんど気づけなかったということだ。（同：110）

こうした体験をもとに、フリーマンは、『私の物語』は私の誕生と死の間の時間的広がり限定されるとの仮定を疑うべきであると主張する。それは、「文化的・歴史的世界が心と自己の奥底に、しばしば知らず知らずのうちに刻みつけられる、その強力さ」を示している（同：113）。そのような「影響力のある無意識的諸要素が現実があり、人はほとんど気づかないままそれらとともにやってゆかねば」ならない。「私たち自身の個人史の気づかない側面があり、それが世界との今現在の関わり方に影響している」（同：113）。これが「ナラティブな無意識」である。

「私」とは私自身のユニークな歴史の端点であるだけでなく、私に先立ち、私自身の境界を越える歴史の端点でもある（同：113）

フリーマンは、自分の「物語」に強く関与する、しかし私の人生の時間に先立っていた出来事のイメージを「記憶」と呼ぶべきかどうか、迷いを示している。確かに、実際に私が経験した出来事の記憶には「現実」という「留め金」があり、それを超えた形で広がる出来事の記憶は単なるイメ

ージの寄せ集めであるという、大きな落差があるだろう。しかし、結局のところ彼は、前者を「第一次オーダーの自伝的記憶」、後者を「第二次オーダーの自伝的記憶」と呼んで区別するにとどまる。それらは、いずれも「自伝的記憶」なのである。「私」がそのイメージを身体的に呼び起こす（想起する）時、どこまでが実際の自分自身の体験なのか、どこからが外部のイメージのとりこみなのかを、「私」は厳密に区別することはできない。そして、H・G・ガダマー（『真理と方法』）の次の言葉を引いて、この拡張された記憶の領域を「深い記憶」（同：132）と呼ぶ。

「記憶という現象を、心理的な一能力と見なすことはやめて、有限かつ歴史的な人間存在の本質的特徴として認識する時期がきている」（同：132）

私たちの顕在的なアイデンティティ、つまり私たちが何者でどのような人間なのかの意識的な感覚と並んで、深いアイデンティティと呼べるものがある。この用語で私は、その起源を人生の個人的な諸事項ではなく、歴史の織物に見つけることのできるアイデンティティの諸次元のことを言っている。（同：132）

「深い記憶」の想起は、（第一次オーダーの）自伝的記憶の中に封じ込められていた「私」の物語を、異質な時間の広がりの中に置き直すことになる。

小林が、父の日記とアンネの日記を携えて、ドイツからポーランドへ、オランダへと旅をする時、彼女が試みていたのは、“時のつながり”を別様の配列へと変換することではなかつただろうか。線型的な時間の流れの中で、ある狭い幅の中に封じ込められる形で歴史のアイデンティティを与えられている「私」。その「私」を成り立たせている“時・空間”の枠組みは、別の時代、別の場所に生きた人の経験を、決定的に隔てられたものとして、「私」から遠ざけている。だが、「私」の生を可能にしている時間の流れ、記憶の厚みは、歴史的時間の中に限定された“一個人”の経験の幅をはるかに超えて、遠く隔てられた“他者”の生に通じている。そうした、別様の“時のつながり”を想起することが、近代的時間の枷——自己と他者を隔てる装置——に抗する振る舞いとなる。『親愛なるキティーたちへ』に記された小林の実践は、その壮大な企ての一行程なのかもしれない⁵。

7. 「時間」／「自己」を書き換える

父とアンネ・フランクの伝記的同時性と、二冊の日記との偶然の出会い。小林はこれを、「私」という存在の歴史的成り立ちを示すものとして、受け止め直す。

ナチス・ドイツによるユダヤ人の迫害と、その中での一人の少女の死。その出来事は、いわゆる（近代的な意味での）歴史的因果連関において、小林司や小林エリカの人生に関わっているとは言

えない。しかし、同じ“世界”の中で、同じ“時間”を生きた二人の生は、潜在的な呼応関係にある。そして、「私」という存在の成り立ちに、この二人の存在が関わっている。

この通時的（垂直的）であると同時に共時的（水平的）な関係。その偶発的な関係の必然を受け止め直すための行動。それが、この旅の企てであったように思える。それは、自己と世界との関係を書き直す試みである。

フリーマンは、深い記憶との接触は、歴史の書き換えであると同時に、自己の書き換えであると述べていた。「私とは何者か」という問いに対して、供給される物語の様相が変化する。遠く隔たっていた「出来事」が、日記的時間の隣接関係を伝って、「私」のもとにつながる。そのようにして、「日常」と“戦場”が、並列する複数の時間として、接続する。

例えば、2009年4月5日に、小林はアウシュヴィッツを訪ねる。その記録の中で彼女は、昭和20年（1945年）⁶4月5日の父・小林司の日記と、1944年4月5日⁷のアンネ・フランクの日記を並べて見せる（図3）。

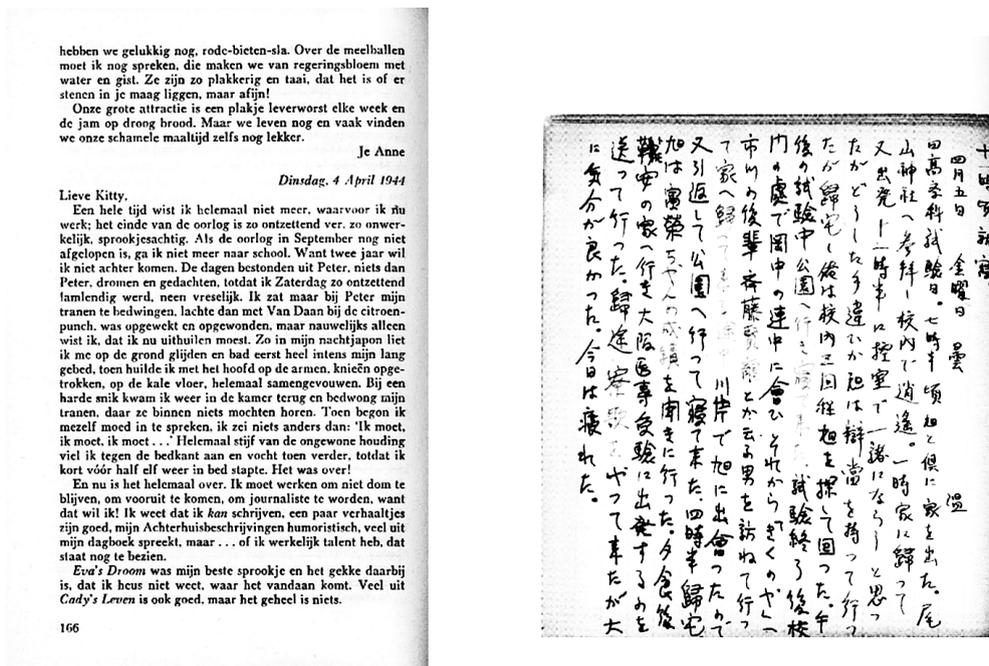


図3 2つの日記（左：113，右：111）

「異なる時間，異なる場所で，私たちの人生の中の，ある一日は過ぎてゆく」（112）と，小林は記す。確かに，三者の生きた「一日」は，「異なる時間」「異なる場所」で過ぎてゆく。しかし，このつながりのない，それぞれの「一日」の呼応関係の中で，いま私が生きている「世界」が成り立っている。日記と日記の並列，日記から「日記」への平行移動。その反復によって私たちは，「異なる時間，異なる場所」で過ぎてゆく「ある一日」どうしの出会いを，ひとつの歴史の形として生

きることが可能になるように思えるのである。

【注】

(1) 小林エリカは、1978年、東京生まれ。2007-8年にアジア・カルチュラル・カウンシルの招聘でアメリカ・ニューヨークに滞在経験をもつ。作品には、『爆弾娘の憂鬱 恋する放射能』(1999年)、「ネバーソープランド」(『文藝』2000年秋号)、『空爆の日に会いましょう』(マガジンハウス 2002年)、「ノースショア」(『群像』2007年4月号)、「ぼくのアンネ」(『群像』2008年11月号)、『親愛なるキティーたちへ』(リトルモア、2011年)、『この気持ち、いったい何語だったら通じるの?』(イースト・プレス、2012年)、『忘れられないの』(青土社、2013年)、『光の子ども1・2』(リトルモア、2013年)、『マダム・キュリーと朝食を』(集英社、2014年) 他がある。

(2) ポストメモリーは、他者の記憶の想起であり、自己の直接的な身体的経験の「外」にある出来事を、自らの記憶の領域に呼び込んでいく実践である。したがって、その「隔たり」を越えて、先行世代の経験を呼び込んでいくための「^{メディア}媒体」が要求される。

ハーシュが『ファミリー・フレ임ス』で中心的に論じたのは、「写真」というメディアの働きであった。彼女は、自分自身の自伝的エピソードに加えて、アート・シュピーゲルマンのマンガ『マウス』での「写真」の挿入の意味について詳細に論じている。また、『ポストメモリーの世代』では、『マウス』との比較の対象として、W.G.ゼーバルトの『アウステルリッツ』が取り上げられている。プラハに生まれたユダヤ人で、1939年、4歳の時にイギリスに移送されて生き残った人物アウステルリッツが、先行世代の記憶を探し求める旅を描き出すこの小説にも、多数の写真が挿入されている。

しかし、「写真」だけが、世代を超えた「記憶」の形象を媒介するわけではない。ハーシュは、論文「記憶に触れるもの」(2017年)において、女性に対する暴力の記憶を表象しようとする3人の女性アーティスト(アリナ・シャポチニコフ、パトリア・クローニン、アルケタ・ジャファ＝ムリパ)の作品について論じている。彼女たちの作品ではしばしば、女性たちの身に着けていた服・布地が、記憶のメディアとして大きな役割を果たしている。また、「服」と「写真」を媒介とする記憶実践として、私たちは、石内都の一連の実践を想起することもできるだろう。

さらに、ポストメモリーのメディアとして、あるいは最も強い力を及ぼすのは、かつてそこに出来事が生まれた「場所」そのもの、であるかもしれない。例えば、カイル・イケダは、目取真俊の小説作品群を「沖縄戦の記憶」に照準化し、ポストメモリーの文学として読み取っている。この時、沖縄戦の記憶の特徴は、戦後において人々が暮らしてきた場所が、そのままトラウマ的な出来事の起こった場所に重なっているところにある。イケダは、ハーシュの考察を参照しつつ、目取真において「先行世代の記憶」の喚起を可能にしているのは、「沖縄戦下の出来事」の「地理的近接性」であるという(Ikeda 2014)。ここでは、土地の風景そのものが、ポストメモリーのメディアとなる。

小林が出会った「日記」もまた、先行する世代の経験を伝える「メディア」のひとつとして位置づけることができる。それは、単に「記録」としての価値をもつだけでなく、日付を通じて、一日ごとの記述の反復を通じて、書き手と読み手のあいだに、ある種の共時的な経験の分有を可能にするように思

われる。

- (3) 小川洋子においても、触覚的経験が過去とのつながりを呼び起こす上で大きな意味をもっていた。小川は、1994年にアンネの家（隠れ家）を訪ね、そこで支援者であったミープ・ヒースに会っている。その際、残されていた、アンネのケープに触れている。

「触ってみてもいいですか？」

わたしはそろそろと手をのばす。はかないほどに柔らかい。アンネが手にした同じものに、自分も触れている。そのことを一瞬不思議に感じる。でも本当は、不思議でも何でもないはずなのだ。アンネはわたしと無関係な歴史の中にいるのではなく、確かに現在とつながった時間の中にいる。50年などという月日は決して果てのないものではない。すぐ手の届く場所にある。現にわたしは今、アンネの化粧ケープに触っている。(小川 1995→1998 : 144)

ここでも、“時間の経過”というある意味では厳然とした現実を超えて、アンネと小川を隣接的な関係に置く媒体として「服」が機能している。

- (4) 小林は「アウシュビッツ」と記しているので、引用ではこれに倣う。本稿では、前稿（鈴木 2018）との連続性を意識して「アウシュヴィッツ」と記す。
- (5) その企ては、「3.11」以後、原子力と放射能の“歴史”を、近代的時間のスケールの外部で再構成していく、小林エリカの一連の試みへと引き継がれる。そこで、彼女の“行動”をたどる作業は、また別の機会に改めたい。
- (6) 小林は「昭和20年」と記しているが、日記の執筆期間を考えると「昭和21年」かもしれない。
- (7) 挿入されたオランダ語版は「4月4日」とあるが、深町眞理子訳（文春文庫、2003年）では「4月5日」の記録に該当する。小林は「4月5日」のものと位置づけている。

<テキスト>

小林エリカ（2011）『親愛なるキティーたちへ』、リトルモア

<参考文献>

- Dimock, Wai Chee (2006) *Through Other Continents, American Literature across Deep Time*, Princeton U.P.
- Freeman, Mark (2010) *Hindsight, The Promise and Peril of Looking Backward*, Oxford U.P. (鈴木聡志訳『後知恵 過去を振り返ることの希望と危うさ』、新曜社、2014年)
- Hirsch, Marianne (1997) *Family Frames, Photography, Narrative, and Postmemory*, Harvard University Press.
- (2012) *The Generation of Postmemory, Writing and Visual Culture after the Holocaust*, Columbia University Press.
- (2017) Ce qui touche à la mémoire, *Esprit*, No.438, Centre National du Livre.
- Ikeda, Kyle (2014) *Okinawan War Memory, Transgenerational Trauma and the War Fiction of Medoruma*

Shun, Routledge.

小林エリカ (2008) 「ぼくのアンネ」『群像』, 2008年11月号, 講談社

小林エリカ (2002) 『空爆の日に会いましょう』, マガジンハウス

小林エリカ・巽孝之 (2014) 「対談 遠い時間とのつながりを見つめる」『すばる』, 2014年10月号

小川洋子 (1995) 『アンネ・フランクの記憶』, 角川書店 (→角川文庫版1998年)

鈴木智之 (2018) 「アンネ・フランクを想起／想像する——小川洋子『密やかな結晶』, あるいは「消失」にさらされる生」, 『社会志林』, 第64巻・第4号, 法政大学社会学部学会